

---

# Stragglers Party

榊屋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Stragglers Party

### 【Nコード】

N0210X

### 【作者名】

榊屋

### 【あらすじ】

この物語に『主人公』はいない。この物語に『仲間』はいない。この物語の『結末』は知らない。この物語を『描く』ものだけがそれぞれ存在している。『自分』が様々な謎にそれぞれの形で立ち向かう。これはそんな物語だ。      ネタバレの危険性があるため、序章が終わるまであらすじは意味の分からない感じになります。申し訳ございませんが、しばらくお待ちください。

## 1話 表面上の奇跡

僕はいつも通り学校へ向かう。3月22日。高校受験も3日前に結果発表され、本当の意味で終わり、卒業式も明日と迫っていた。学校は僕の家から自転車で約5分。

学校についた。

本日は卒業式のリハーサル（リハーサルって何だよ。僕らの卒業は1回だけだぞ！なのに先生達はどうして俺達にリハーサルなんてことをやらせるんだ。大体、僕らはそ【省略】）えーっと、何の話だったか………？

ああ、そう。

リハーサルのため、荷物はそんなに多くない。僕は荷物を机の上に置いて、ポケットの紙を確認した。

「よし………」

「何が『よし』なんだ？」

と、そこで友達が来た。僕は焦ってポケットに紙を入れる。

僕の幼馴染で、気さくな態度で誰とも仲良く出来るという才能を持つ、高校生活に不安なんてなさそうな、校則をしっかり守った髪形の、運動神経トップクラスで成績はトップ、名門高校を受験した生徒会長である、針葉陽一様だ。

「長い」

と、僕は理不尽に呟いた。全く。もっと平凡な人間であれよ！と、責任転嫁している僕を見て、針葉は不思議そうな顔をして、

「何か忙しそうだな」

と笑った。

「そういや」

と、眼鏡の位置を戻して（優等生＝眼鏡という偏見は離れないのか。悲しきかな）、針葉は言った。

「<sup>かさね</sup>襲、高校受験しなかったんだって？」

襲というのは僕の名前だ。女みたいで、あまり気に入っていない。  
「まあな」

「どうしてだ？働かないといけない状況にでもなっちまったのか？  
姉さんと2人暮らしたし……………」

「姉さんって……………」

「ああ、悪いな。昔からの癖だ……………。で？どうなんだ？」

「別にそういうんじゃないんだけど……………」

僕は1度撤回してから、言うべきか否かを考える。

……………うーん。

「実は、高校に行くんだけど、この辺の地域じゃないんだ」

「ってことは、推薦で行くのか？」

「どうだろう。授業料免除、全寮制で教科書とかも無料らしい。金は全く掛からないから両親は了承しているし、姉さんも『さっさと行け』ってさ」

僕は笑ってそう言った。

「あの人らしいな」

針葉も笑う。

「まあ、これはどっちかというと招待って感じだな」

「そうだよな。お前は部活には入っていないし、勉強も言うほど出  
来ないしな」

……………はつきり言ってくれる。

ま、否定できないわけなんですが。

「そうだ、針葉」

「何？」

「最近、世間で話題になっている暴力事件知っているだろ？」

「……………ああ」

暴力事件。

正確に言うならば、暴力致死事件。

「あれって何件目だっけ？」

「あ……………確かね」

針葉は思い出すように額に指を当てた。

「昨日、17人目が死んだって今朝のニュースで言ってたよ」  
「…………へえ。」

「あれって、無差別殺傷事件の延長なんだろう？」

針葉がそう言った。

無差別殺傷事件。

数ヶ月前からこの街にのたまっている、謎の殺人鬼。

最初の事件は、老婦だった。1人の老婦が家の前でナイフで刺されていたそうだ。

その事件がニュースで取り上げられたのは1回のみ。その後は、一度もその事件は取り上げられなかった。

その後、会社員、主婦、ヤクザ、学生、ホームレスなど様々な人間が殺されたが、それぞれの事件は1度ずつしかニュースとして取り上げられては居ない。

しばらくして、その事件に噂が流れた。

『その人々を殺したのは、殺人鬼ではなく警察の上位の人で、事件を取り上げる事は出来ない』

という内容だった。

それは、なるほど納得できる理由ではある。

しかし

「途中から殴殺に転向したのは不思議だよな」

僕はそう言っつて、針葉に同意した。

「どうしてだと思う？」

僕は針葉に訊いた。

「分からないな…………殺人鬼の気持ちは僕には」

「そうか？天才なら分かるんじゃないか？」

「別に天才じゃないよ」

苦笑いで…………しかし強い口調で針葉は言った。

「そうか。何か悪かったな」

「いやいや」

そう言つて針葉は笑つて、事件の話を打ち切った。

まあ、彼も暇つぶしにはなつただろう。

どうせ明日には皆忘れる話だろうし。

チャイムが鳴つたので、教室に入つて先生の話を聞い（ている振りをし）て、体育館で卒業式のリハーサルを終わらせた後、針葉を家に誘つた。

「いや、今日は止めておくよ。姉さんによろしく伝えてくれ」

「お前の姉さんじゃないだろ」

「そうだね。えつと……」

「美雪だ」

「そう。姉さんによろしく」

「直つてない!!」

と、ぐだぐだな会話をしてから帰途に立つた。自転車だけんど走る。

思い切り漕いだ。

なんとなく、ストレスを発散するように。

気分はスカツとする。

そう、いつもの夜のように。

## 2話 裏表リミテッド

家に着く。

「ただいま」

返事は無い。

僕はリビング横の座敷に入り、祖父母の仏壇に手を合わせる。

「・・・・・・・・」

僕はやはり、父さんの息子なのだろう。ねえ、じいちゃん、ばあちゃん。

誰も何も答えない。

僕はそのまましばらく座って手を合わせていたが、部屋の古い時計がボーンという音を立てて響く。

時計は3時を指していた。リビングのソファに転がって、テレビを点けた。

「・・・・・・・・ニュースはまだやってないか」

昔見たドラマの再放送をしていた。  
だとすれば休憩しますかね。

「ただいま」

という声で目が覚めた。

ああ、寝てしまっていたのか、ということに気が付いた。

「もしかして寝てた？テレビの電気がもったいないよ」

姉が声を掛けつつ、そして冷蔵庫の前へ。

「寝てない」

「あんた、昨日の夜遅くも出かけてたでしょ？」

聞いてないな。ていうか知ってたのか。

「殺人鬼だか暴力男だか分かんないのが、うるついてんだから気をつけるように」

そう言つて1? サイズのペットボトルのお茶を飲み始めた。

「姉さん・・・・・・・・」

「何?」

「・・・・・・・・本当に高校行つていいの?」

「いーよ。無償でしょ? 他んどこよりマシ」

「寂しくない?」

「はあ?」

姉は間拔けな声で応対した。

「父さんと母さんは海外で活動中・・・・・・・・祖父母も他界・・・・・・・・姉さん1人になるでしょ?」

「アホか。私はもう18だ。もうすぐ成人だつっの」

「でも彼氏もいな「殺すぞ」

「はい、すいませんでした。包丁を下ろしましょう」

姉の殺すときの殺意は、冗談じゃないくらい僕の心をえぐつてくる。父と母の影響だろうか。

危険な女だ。

何とかしないと。

「あんたは心配しなくていい」

姉はそれだけ言つと2階に上がっていった。

・・・・・・・・

時計を見る。

6時だった。つまり3時間余り寝ていたということか。

シヨックー。

で、テレビ(点けっぱなし)を見る。

『本日、15時頃、1人の男性の殴殺死体が発見されました』

15時・・・・・・・・僕が寝始めた頃か。

『昨夜の未明頃、殺害されたと思われ、以前からの無差別殺傷事件と同一犯で、これで被害者は17人目と警察は発表しています・・・』



・・・』

その後、キャスターやコメンテーターが事件について話し始めた。どうも人気のないところで殺されたらしく、偶然通りかかった高校生3人のグループが見つけて通報したそうだ。普段は通らない帰り道で、もし通らなかつたら気付かなかつただろう、ということらしい。

「さてと」

僕は呟いてから立ち上がり、2階に上がって仮眠を取る事にした。テレビを切るのも忘れずに。

階段を上がって自分の部屋の前に、そしてドアノブに手を掛けた。

「襲」

と、隣から声が上がった。

見ると姉が自分の部屋から顔だけを出してこちらを見ている。

「夕飯は？」

寝ようとしていることがばれているようだ。

「起きたら食べるから適当に作っというて」

「コンビニ弁当でいいか？」

「作っつけ！」

俺は姉を叱咤してから、自分の部屋に入った。

部屋はがらんとしていた。

荷物はほとんどまとめられ、寝るのはロフトなのでベッドもなく、あるのはもう使うことも無い学習机と椅子だけだった。

「・・・・・・・・」

僕はポケットから紙を取り出して、机の上に置いてからロフトを上げる。そして布団に横になってから携帯電話を開く。

「・・・・・・・・」

トップニュースでは、『現代のねずみ小僧』という見出しが『オクシヨン 全て贋作』というものがあつた。もちろん、僕らの地域の『連続殺傷事件 17人目』というのもあつた。世の中、犯罪に満ちているなあ。

思いながら連続殺傷事件の記事を見る。

「今まではナイフで14人だったが、19日以降、殴殺に転校した・  
・・・か」

呟くように読み上げる。

まあつまり殴殺死体は3人ということか。

ということは事件は殴殺死体は3日前から1つずつ作られているわけだ。別に無差別殺傷事件をそこまで取り上げる必要はなかったんじゃないだろうか。だって、どうせ数年後には何の問題もなかったように表舞台から消えるのだから。

さて、眠りに入ろう。

ピピピピ・・・。。

と、アラーム設定しておいた携帯電話が、音とともに震え始めた。  
時間は12時。

・・・。。よし。

隣の部屋・・・。。姉の部屋の扉をノックする。

返事は無い。開ける。

居ない。

1階へ降りる。誰も居ないし、飯も無い。

計画通り、結局はコンビニに行ったのだろう。僕と一緒に今まで  
寝ていたであろうことは容易に想像できる。

「・・・。。やっぱりなあ」

僕は自分の部屋に戻って着替える。黒いパーカーとジーンズに身  
を包む。

「・・・。。姉さんは楽にしてあげないとな」

僕は自分の学習机の中からナイフを取り出した。

父の名前が柄に刻まれているナイフだ。元々はふたが存在してい

なかったそうで、父が蛇の皮のようなもので作ったナイフカバーに入れてある。取り出して刃を見る。研いであり、錆なんて1つも見当たらない。

準備完了、計画を遂行しよう。

「つと……」

部屋を出ようと足を向けてから、机の上に置いておいた紙をポケットに入れた。それから今度こそ部屋を出た。

家を出て、コンビニの方向を見る。

月が無い空で星の光を感じる。

「……行ってきます」

今行くよ。

楽にしてあげるからね。

姉さん。

### 3話 月無き夜に、星に願いを

月の無い夜。

その田舎町で、人も車も見られない中で僕を含めた2つの影が走り続ける。

「・・・・・・・・」

僕は静かに前方の影を追いかける。対して、

「ハア・・・・ハア・・・・」

向こうは苦しそうに逃げ続ける。

僕は強くナイフを握り締める。そして息切れしないような全力で追いかける。そのくらいの呼吸法は知っている。僕は頭はいいのだ。体力もある。

「・・・・・・・・」

しかし、向こうもなかなかしぶとい。女にしては体力がある。僕と同じ運動方法を取っていないのだから、凄まじい体力だ。

コンビニからの帰りだったろう。そのときに声を掛けた僕を見て見ただけで、逃げ去っていった。まだナイフも出していなかったのに、だ。相手を殺人鬼だと気付いて逃げ出した神経のすばらしさ。未恐ろしい女だ。

いつ考えても凄いい姉さんだ。

殺したいほど。

「ハア・・・・ハア・・・・」

苦しそうに走っていく。

大丈夫、もうすぐ楽にしてあげるから・・・・・・・・！

僕はフードを深くかぶりなおした。

気付くと田舎町では、まだ都会部に値する地域に到着した。

人は居ない。そりゃあそうだ。僕のような殺人鬼が存在する街で夜中に外に出ようなどと考える者が居るはずも無い。のに、僕は連続で人を殺すことができる。

だって物好きな奴が居るんだから。だから僕は止まれないのさ。  
路地裏に入ったその「物好きな奴」を見て、スパートを掛ける。  
そしてそこで追いつくことに成功した。

「っーかまーえた。」

「く……………!」

「……………」

僕はその顔を殴った。女は飛ぶように奥へ吹き飛ぶ。

「……………」

僕は自分の拳を見直す。

当たった感触の割りに、向こうにダメージはほとんど無いようだ。  
やはり凄い女だ。

ナイフを持ってきておいて良かったようだ。

僕はまだ倒れ伏している対象に向かってナイフを突き立て

「!？」

腹部に強烈な痛みと衝撃が走った。

そのまま数メートル僕が転がって配水管のポールに背中をぶつけて止まった。

「……………」

そこには男がフードをかぶって立っていた。

男は黙って口に何かをスプレーする。恐らく……………。

「サッサト逃ゲロ!」

変声期のような音を出して、女を見る。

女八男の姿を見て、頷いて逃げ出した。

「……………」

「悪イナ。アレヲ殺セルワケニハイカナインダヨ」

「……………」

「アレハ僕トハ違ッテ表立ッテ強イワケじゃない」

声が戻ってきたのだろうか、男はもう一度口にそのスプレーを入れる。

「……………ヨシ。デ、アレハソノキニナレバ何デモ殺スト思ウケド……………」

僕ハソレヲヨシトハシナイ」

聞くのも無駄だ。

僕はそう判断して走り込んだ。そしてナイフを胸部に突き立てようと腕を伸ばす。

「諦メロ」

君はそう言つて、そのままナイフを右手の人差し指と中指の間で掴みとつた。

「！」

コイツはヤバイ。おかしい。

普通の運動神経や握力、そしてこんな状況に即応してナイフを掴むなんて……普通は出来ない。こいつは普通じゃない！

と思つた瞬間。空いていた左手が僕の腹部を殴つてきた。そしてそのままナイフを抜き去り、右手で頭を押さえつけられて、地面に仰向けに倒された。

後頭部に強い激痛が走つた。

「才前二ナイフヲ使ウヨウニ仕向ケタ。才前ハ気付イテイナイダロウナ。デ、才前ハ使い方を知らない。ナイフを使つたとしてもナイフを使つたからこそ、僕にお前が勝てる事は無くなったということだ」

声に戻つた。

そして気付いた。

コイツ……！！

「お前の動機は理解しているつもりだぜ？ 殴殺死体が出来上がり始めたのは、合格発表の当日……つまり、3日前だ。その日以来、1つずつ死体が出来上がっている。……ここまで言えば、誰にでも分かると思うぜ？ なあ」

そう言つて僕を見下ろして、フードを外した。

そして僕の名前を呼ぶ。

「針葉」

「……襲エ！」  
かさね

どういうことだ！うしてコイツが……！！  
ともかく現状回復だ。

僕は馬乗りになっっている襲を蹴り飛ばした。そして距離をとった。

「……」

何から喋ればいいのか、と思っていると。

「まず」

と、向こうから話を始めた。

「動機は『受験失敗』だ。受験に落ちた腹いせに、他の成功した奴らを殺すことでストレス発散しようとしたんだろ？警察は無差別殺傷事件の続きだと思ってるらしいけど、そうじゃないことは俺がよく知ってる」

襲は笑う。

そして僕を指差した。

「犯人はお前だ」

まるで探偵のような振る舞いだ。

「探偵……？僕はそっちじゃないよ。どちらかといえばお前側だ」  
僕側……？

「ともかく」

襲はそう言って話を区切った。

「お前は難関高校を受けて落ちた。いつも天才って言われ続けたプレッシャーとそれによるストレスが爆発した。それでその夜、1人目の男を殺した」

「……」

「何で怪しいと思ったか……それは主に勘だ。お前が犯人じゃないかと思っ、お前の発言の一つ一つを注意して耳を傾けていたのさ。そして今日……いや、もう昨日になっているな。昨日の学校での話に矛盾を発見した」

襲はニヤリと笑った。

何だ。

僕は何を失敗した。

「3つ目の死体が発見されたのは今日の昼だ。なのにお前は朝から知っていた。つまりお前は17人目が死んだのを何故か知っていた。朝は鵜呑みにしていたが、昼になってようやく全てが繋がったんだ」

「……僕は死体を見ただけだ」

「じゃあ何で通報しなかったんだ？どうして夕方まで人が現れないような道を使って登校して来たんだ？何で、ニュースを見たって嘘をついたんだ？」

叩き込むように僕に向かって言い放つ。

何か。

何か言い訳僕は天才だその程度の事瞬時に思いつかないでどうするだから僕は落ちたんだ落ちた？落ちた僕が落ちた違う皆が何かしたんだ僕は何も悪くはない僕は何かしたわけじゃない何もしなかったわけじゃない頑張った頑張ったんだだけど 「あああああああああああああ！！」

僕はそのまま襲に突っ掛かった。

しかし襲はそんなものを諸共しないように受け流した。そのまま今度は額を地面にぶつける。

僕は必死に襲の方に向き直った。

すると、先ほど同様に襲は僕を見下ろしていた。

「全てが指すのは『お前』犯人』という等式だけだ」

襲は僕を指差した。

「お前に学校でこの話をしてプレッシャーをかけて、姉さんを咎に  
使ってみた」

「姉さんを化に……」

困にしていたのか……しかし、事情を知っていた風な感じではなかった。

「昔からの付き合いだからな。姉さんもいつもと違う雰囲気をお前から感じていた。殺気を感じ取ったんだよ。姉さんは、そういうの



に敏感だから」

だからこそ、何の説明もせずに囷に利用したんだけれど。

襲はそう続けて、僕を睨んで「あと」とさらに続けた。

「姉さんはお前の姉さんじゃない」

「悪いな。家族ぐるみの付き合いだったから、無意識だ」

僕はそう言つて静かに立ち上がった。

「初めて会話が成立したぜ」

「もう諦めたんだよ。警察でも何でも呼べ」

襲をそう言つて突き放つ。現状にのつとれば、本来の意味で突き放されているのは僕だが。

しかしここまでバレているのなら、もはや無意味だろうという判断の発言だった。

のだが。

「はあ？」

襲の発言は僕の望むべきものではなかった。

「お前は捕まえない。姉さんを守るためには、殺人鬼のいる町として治安を守るべきなんだよ」

「……？」

確かに、今こうして殺人鬼がいる街並は、その殺人鬼を除けばとても平和だ。

だが。

それはつまり、僕を逃がすという事か？

「つーわけだ」

そう言つて襲は僕から奪ったナイフを僕の前に投げた。  
なるほど。どうやらそういうことらしい。

「……」

僕は落ちていたナイフを取ると同時に後ろに下がった。

襲の手の中で何かが光ったのを見たからだ。

「ばれたか」

そう言つて堂々と襲はナイフを光らせた。

「お、お前……」

「お前には死んでもらうぜ」

何言つてんだコイツ……。しかし、襲の目は本気で、ナイフをしっかりと握っているのが分かる。

待て。

よく考えればおかしい。

何故、コイツは僕の前に現れたんだ？犯人だと分かっている、かつ、3人も殺しているような奴を相手取るなんて、いくら姉さんを守るためとは言え、無謀すぎる。

そして。

そして何故。

何故僕はコイツを恐れているんだ！？

「く……来るな！」

咄嗟にナイフを前に突き出して距離をとる。

「ど、どうして僕を殺すんだ！」

「動揺したな？弱味をみせたら殺人は負けなんだぜ」

「僕が生きていないと殺人鬼は居なくなる！今みたいに治安は守られないぞ！？姉が守れなくなるんだぞ！？」

僕の発言に襲は

「まだ分からないのか。だからバカなんだよ」

と笑った。『バカ』という言葉が僕の胸に思い切り突き刺さる。

その所為か、急に冷静さを取り戻した。

そして走馬灯。

僕と襲、そして姉の3人での楽しかった日々が思い出された。

『警察は無差別殺傷事件の続きだと思ってるらしいけど、そうじゃないことは俺がよく知ってる』

先ほどの襲の言葉が急に思い出された。

ああ、そうか。

そういうことか。

「殺人鬼はお前じゃない。お前の前に居た本物だ」

その声で僕は現実に戻された。  
襲はそう言つて。

僕に逃げる隙も与えなかった。

僕は針葉の首からナイフを抜いた。未だ、鮮血が流れている。噴水のように、とまではいかないが。

「ハハハ……」

僕は静かに笑う。

ピリリリリ……と、何の設定もしていない携帯電話が悲しく鳴る。ポケットの中から携帯電話を取り出す。

『如月 魅了』

と書かれていた。

『もしもし？大丈夫なの？』

「……終わった。ちゃんと」

僕はそう言つて静かに通話を切った。

続いて、

テロリロリンという雰囲気にとぐわなない陽気な音でメールを受信した。

「……」

ニュース速報だった。

「へえ……」

画面には「死宣告、8人目の殺人」という見出しだった。

死宣告。この地域ではない場所で最近、騒がれている殺人鬼だそうだ。

「会いたいもんだな。僕と同じ殺人鬼さんに」

僕はそのままポケットに携帯をしまい込んで、代わりに、入れておいた紙を抜き取る。

『如月襲殿 あなたの入学を心よりお待ちしております。 後世

学園』

紙にはそう書かれてあった。

「行こうか」

誰に言うでもなく、星だけの孤独な空を見上げて僕は呟いた。  
照らす月もなく暗がりの中を静かに歩いた。

### 3話 月無き夜に、星に願いを（後書き）

序章 A murderous friend 編は終了です。

次は序章 A hired killer 編です。

## 1話 宣告

死宣告。

それが俺についた異名だった。

テレビのニュースで放映されている通りなのだが、説明をしておこう。

おもに警察が発表している情報から抜粋しつつ俺の言葉で説明しよう。

死宣告と呼ばれているのは当然理由がある。

俺は殺すと決めた相手に、『あなたを殺します』と宣戦布告するのだ。

宣告された相手は圧力に耐えられず逃げ惑う。

それを追い詰め、追い駆け殺す。そして最後に、殺した者の血液で『宣告通り』と死体の横に書いて完了だ。殺し方は『バラバラ殺人』だ。しかも腕や出欠の状態、断面などから、生きた状態でバラバラにされている。

当然こんな大きな事件を起こせば、誰かが何らかの目的で残虐な犯罪行為を行っている、と誰もが思うものだ。事実、そう思っている者が多い。

ということは一つの疑問が浮かんでくるはずだ。

『何故、死宣告は人を殺すのか』

つまるところ、目的 動機だ。

警察もそれを追っているようだが、いくら探しても動機が一つも出てこない そうだ。

明らかに怪しい。何らかの理由づけくらいできるはずだ。どこか

しら共通点が見つかるはずだ。なのにそれすらも発表していない。さらに言えば、被害者の名前と顔を明かすことをマスコミ各社に禁じているようだ。しかもかなり強い圧力で。

警察も困っているのだ。

つまり、わからないのだ。

警察は犯人が何を考えているのかもわからない。

まあ俺の考えていることがわかるものなど、この世にいるはずもないのだが。

「さて」

前置きはこのくらいにしよう。

3月22日18:00現在。

俺は今、ある中学校の前にいた。

名前は……忘れたが、まあ大丈夫だろう。下調べも何もしていないが。

別の地域には17人も殺人を犯している殺人鬼がいるらしいが、この街にはそんな大罪を犯している者はいない。

俺を除いて、だ。

俺は堂々と入り口から入っていった。

警備員もいない学校だ。まあどの学校にでもあるわけではないし、仕方がないといえばそれで終わりだった。

俺が殺人を犯す理由。

それは人が絶望したときの表情を見るのが楽しいからだ。

人は未来が見えていないこの世界でも何らかの形で希望を持っている。その希望をすべて無　それどころかマイナスにまで持っていくことが成功すれば、俺はそこに快感を感じるのだ。

閑話休題。

どの学年のどのクラスを狙うかも決めてこなかった。  
で、ふと体育館を見てみた。

見たところ卒業式が近いようで、体育館にはそれらしい準備がされていた。

ふむ……。

卒業して高校に入学しようという今、希望に満ち溢れているに違いないな。

だから、3年生を狙うことにしよう。

「見学の方ですか？」

学校の先生だろう青年が後ろから声をかけてきた。

「ええ、息子の入学先にどうかと思ひまして」

「ご自由に見ていってください。この学校は見学自由ですから」

そう言つて青年は俺の横を通つて、前へと進んでいった。

笑顔だった。が、なんだろう……。

違和感を感じさせるような笑顔だった。

「ああ……それで」

俺はつぶやく。

道理で無防備な学校だと思つた。

うちよろしても何ら問題ないということか。

と、すれば。

「あの、すみません」

俺はできるだけフレンドリーに、怪しまれないように声をかけた。

「3年生のクラスはどこでしょうか？」



## 2話 怠慢

ハア……ハア……ハア……。

日は落ちて、空はほとんど暗くなっている。

もうすでに、1時間近く走り続けている。

振り向く。

まだ影は俺を追い続けていた。

「何なんだよ……!!」

何故だ。

どうしてこうなった。

俺は。

俺はどこで間違えた!?

2階。

3年生の教室はその階にあるとその青年が言っていた。

「今日が卒業式でしたから……他の生徒はもう帰っていますが、3年生だけまだ残っています。担任の教師の話や生徒同士の別れの言葉とか……いろいろあるんですよ」

それだけ伝えて、1階にある『職員室』に入ってしまった。

終始、何か含むところがありそうな笑顔だった。

なるほど。卒業式が近いのではなく、今日が卒業式だからそのまま形が残っていたのか。

となると、3年生よりも2年生を狙う方が希望をつぶすのには良いのかもしれないけれど……どちらにせよ対象は3年生だ。だって3年しかないんだもん。

俺は自分のジャケットの内側のポケットを確認する。

銃が1挺とナイフが1本。

ただの中学生の人生くらい簡単に終わらせることができる。

俺は2階に向かおうと、階段の方に足を向けた。

「ん……？」

階段の横にエレベーターがあった。

別にエレベーターをしようと思った訳ではない。

エレベーターの前に車椅子に座った少女がいたからだ。

「こんにちわ」

少女は笑顔を浮かべて俺にあいさつした。

先ほどとは違って、自然な笑顔だった。

「……こんにちわ」

俺がそういうと、エレベーターに乗り込んで上に上がっていった。

「……」

あれもきつと3年生なのだろう。誰も車椅子を押してあげるような人間はいなかったことに多少違和感を感じたが、そういうこともあるのだろう。だからそれ以上気にも留めなかった。

エレベーターは2階で止まった。まあ、残っているのは3年生か先生なのだから当然といえば当然だった。

「……」

あの少女も殺すことになるのだろう。

別に希望を持った人間しか殺さないわけではないのだけれど、未来に希望を持っていそうにない奴までも殺したいのかと問われれば俺はこう答えよう。

殺したい。

「さてと」

俺はつぶやいてから階段を昇っていった。

2階に上がると、その階は少しざわついていた。俺が高校生だった頃も同様な状況だった気がするし、気持ちはわかる。が、お前ら

はそれ以上のざわつき 『動揺』を得ることになるんだぜ。  
目の前の教室の後ろの扉に手をかけた。  
思い切り開ける。

開けた瞬間、ざわめきは一度静けさに変わる。先生も生徒も俺を見て、まずは疑問を持つはずだ。

「誰……？」

誰かがつぶやいたような気がする。

それを合図にするように、俺は銃を取り出した。

世界は常に変化している。この空間だって例外じゃない。

ざわめきが静けさに変わり、次の瞬間には

「きゃあああああああああ！！」

それは戦慄に変化していた。

一人の女子生徒のその叫び声で皆がはっとしたように動き始めた。男子も女子もそれぞれ悲鳴や狼狽のような声を上げて逃げ惑っている。それでも落ち着いたように対応して、全員が俺から離れて行くとする。

パン！

と。

銃声が響いた。もちろん俺の銃が火を噴いたのだ。黒板に弾丸が突き刺さっている。

「動くな」

俺は一言だけつぶやくように言った。それだけで空間はまたも静けさを取り戻し、動きも止まった。

支配感。

何と言っただろう……恐らく天下統一した豊臣秀吉や徳川家康はこういう気分を味わっていたんだろうな、と感じた。

「さてと……」

誰から殺そうか。

見たところ男女に差異はない。頭のいい奴か人望の厚いやつを殺

そうと思ってきたのだが、はてさてどうしたものか……。

そう考えたのだが。

「逃げなくていいんですか？」

斜め下でそういう声がした。

「……！」

何かと思えば、先ほどの車椅子の少女がいたのだった。

入ってきた瞬間に、恐らく目の前にいたのだらう。しかし気づくことができなかった。

いや そこじゃない。

「何がしたい」

俺は質問した。

少女はまっすぐ俺を見つめる。

周りの生徒たちはその状況を見て、そわそわしたりびくびくしたりして、落ち着いていない。

それに対して、俺に発言してきた少女はこちらが驚くくらい落ち着いた対応だった。

「答える、何が言いたい」

「……」

少女は黙って自分の耳を2回ノックした。

耳を澄ませ、ということか。

その時小さく音が入ってくる。

……ウー……ウー……、と。

「け……警察……！？」

何で……。

いくらなんでも早すぎる。

いや 勘違いだ。これは別の場所へ向かっているだけで

「あれは間違いなく、ここに向かっていますよ」

堂々と少女は怖がることもなく、俺に向かって言う。

「どうということだ」

弱味を見せるわけには行かない。俺が殺人鬼である以上、弱いところを見せることは敗北を意味することになるのだ。

「私が連絡しましたから」

そう言っただけ少女は特にそれを誇るでもなく、静かな目をして俺を見ていた。

その発言によって空気が少し緩んだのを感じた。

周りの生徒が少し安心していているということ

「ふざけんな!!」

俺は銃を乱射する。

今度は叫び声が上がった。

「くっそが!」

ここで　こんなところで捕まるわけにはいかない!

俺は車椅子の少女の体を引っ張った。

少女の体躯は思ったよりも軽く、持ち上げることができた。

「く……」

少女は抵抗しようとするが、意味なく俺に引っ張られる。

「ルル!」

ご学友と見られる女生徒が、少女の名前を呼んだ。

残念ながらそれでも俺は少女を連れ去った。

「どうして警察に連絡できたんだ!」

俺は階段を走り降りながら尋ねた。

「不審者だったから連絡しただけですよ」

「は……!？」

「この学校に勝手に入ってきたじゃないですか」

「な……」

どういうことだ!?

この学校は見学自由じゃ……。

「今日は警備員の人も既に出払ってしまっていますが、この学校は許可なく入っていい学校ではないんですよ」

「そんな……」

驚きつつも俺はそのまま走り続ける。

そこであの青年の顔が思い浮かんだ。あの妙な笑顔……。

だましやがったのか!!

だがそんなことをこの女に行っても仕方がない。

「さらに言えば、私は人の殺気を感じることができんですよ」  
そう言って少女は。

先ほどとは違い、ニヤリと嫌な笑みを浮かべた。

瞬間だった。

寒気とともに彼女の足元に目が行った。

おかしいとは思ったのだ。

足が使えない女を引っ張ると、それはただのお荷物のようになる  
そくだ。だから人質として、足の不自由な奴は使い勝手が悪い。

それを思い出したがもう遅かった。

その少女が二本足で立っていたことに気付いたのも、遅かった。

### 3話 殺人

気づいてすぐに俺は少女の体躯を投げ捨てた。

寒気はすでに通り過ぎていて、恐怖に変わっていた。

「お前、何なんだよ！」

「じゃあ貴方はいったい何でしょう？」

クス、と。

軽い笑い。空気が抜けるようなその笑いは、嘲笑や苦笑に近いもので、しかしそれ以上に恐怖を感じさせた。

もう後は考えるまでもなかった。

俺はそいつに背を向けて走り出した。

1時間以上走ったのだ。

それでも影はゆらりゆらり、のらりくらりと、迫ってきていた。

俺の全力疾走にまるで、歩くようなペースで影は追ってくるのだ。

「畜生！畜生！！畜生！！！」

くっそが。

どうなっている。

これは一体どういうことなんだ！！

「いつまでも鬼ごっこを続けんですか？それともかくれんぼにでもしましょうか？」

女はそう言っただけを追い駆け続ける。

よくよくみると、一歩一歩で驚くくらい進んでいるようだ。

『縮地』。

それが突然頭によぎった。

いや、そんなわけがない。あんなの現実にできる奴なんているはずがない。

俺は走り続けた。

どんな道筋を何分走り続けていたのかも覚えていない。  
外はかなり暗くなっており、月明かりも見られなかった。

そこがどこなのかもしれない。理解はできていなかった。工場の跡地ということだけは分かった。

「やはり、かくれんぼの方が正解だったか……」

あの速さを相手取るには、俺の体力にも限界があった。だからうまく路地裏やら曲がり角やらを利用して上手く撒いた

「かくれんぼでも私には勝てませんよ」

つもりだった。

「……!?」

「残念でしたね。私からは逃げられません」

私は鬼ですから。

そう言って少女は笑った。

「ところで」

少女は更に続ける。

「貴方はいつたい何者なのかしら？」

「俺は……」

俺は。

俺は銃を取り出した。

「俺は死宣告だ！」

そして弾丸を放つ。

ほぼ距離は1メートル未満。  
ならば、負けるはずがない。



そう踏んでの行動だったのだが

「!？」

少女は無造作に腕を振っていた。

いや、俺からすればそれは無造作だったのだが、彼女の眼は明らかに何かに狙いを澄ましていた。

そしてその狙いが的中したのだろう。

空中で弾丸が真つ二つに切られ、さらに4等分されて落下した。

「は……!？」

彼女が切った。

そうとしか考えられないが、そうとは考えにくい。

「な、なにをしたんだ!？」

「今……死宣告って言いましたか？」

少女は少し怪訝そうに俺を見つめた。

「ああ。この辺一帯の殺人鬼はこの俺

」

「どうして殺しているの？」

少女はそう言っただけをにらむ。

「は……!？」

「貴方はどうして、殺人を犯し続けるんですか？」

「……」

動機。

警察官も知らない、俺の殺人の動機。

その意味をこいつは興味本位で知りたいということか。

なら、教えてやろう。

「快樂だ」

「……」

「俺は希望を持っている人間を殺すことに喜びを感じている。俺にとって殺人を犯す理由はそれだけで充分」

ぼとり。

「ん」

何かが落ちた音に気付いて、俺は左側に視線を向けた。

長い棒のようなものがあり、途中が屈折している。そしてその上部には5つの突起が見えた。

え。

いや、この形は。

腕だ。

「う、うああああああ!!」

俺は自分の左腕がなくなっていることに気付いた。それからすさまじい痛みが体を襲った。

「適切なことを言わないでください」

強い嫌悪の視線を俺に向けていた。

「よく考えればわかるでしょう？警察が動機を見つけれてないわけがないじゃないですか」

「ああああああああ!!?」

痛みに叫び続けている。

それでも、こいつの発言に耳を傾けていた。

どういうことだ？つまり、警察は動機を見つけていたということか？

「どうして死宣告をされた人は宣告された時点で 脅迫された時

点で警察に連絡しなかったのでしょうか？」

「ああああ!!」

「逆転の発想です。つまり、なぜ脅迫された時点で連絡しなかったのかを考えるのではなく、連絡できない人間とはどんな奴なのか、ということですよ」

少女は俺を見下ろして、淡々と続ける。

俺は脳をかき回して、思考を何度も何度も繰り返す。

つまり、警察と関わることを拒否するような人間　警察に調べられては困る人間。

「ま、さ、か……」

俺は小さな声でつぶやいた。

「そう。宣告された人間　殺された人間は全員犯罪者なんですよ」  
そうか。

そういうことだったのか。

犯罪者は警察に連絡することはできない。だから、警察はいつも死宣告に後れを取っていたのか。

「警察側も、『何者かが犯罪者を殺している』なんていう噂を流すわけにはいかないから、被害者の名前すらも出すわけにはいかなかったんですよ」

どっかの新世界の神がやろうとしたようなことが起きるのは現実世界では避けたいことでしょうか。

そう言って少女は自分の言ったことを嘲るように笑った。

「お前……何なんだよ」

俺は（本当の意味で）決死の覚悟で、少女に問いかける。

「まだわかりませんか？」

「……いや」

正直なところ気づいていた。

死宣告というもののへの異常な依存。というよりは、まるで自分のことのようにすべてを理解している。

つまり

「本物の……死宣告か」

俺は少女を見た。

「ええ」

少女はもう一度にやりと笑った。

その笑みにあつた恐怖は、最終的には、畏怖にまで変わっていた。だが、不思議と今度はそこまで逃げようとは思わなかった。なぜなら



死体の横に、宣告通りと書いてから私は立ち上がった。

「貴方もこんなことさえ 犯罪行為さえ行わなければ、我々の組織に殺されることはなかったんですよ」

我々の組織。

簡単に言えば、犯罪者撲滅組織だ。

私は諸事情によりそこに所属することとなり、諸事情により犯罪者を殺している。

詳しい話は私はしたくないので、省略する。

まあ誰が聞いている訳でもないのだけれど。

「それにしても」

ここで私は死んだことにした方が本当は都合がよかったのだけけれど……。

「どう伝えたものかしら」

私がそう呟くと

「！」

カラスが工場跡地に入り込んできた。

「何かしら？」

私はそのカラスに話しかけた。

『本部の方に届いた通知だ。マリア様が謹んでお受けしろと言っている』

とカラスは言つて、口に咥えていた封筒を落とした。

私はそれを拾い上げた。

『では私はこれで。こいつは、破壊しておいてくれ』

カラスはそう言つて、さらに口の中から通信機を吐き出してから飛び去つて行った。

私はまず、その通信機を踏みつぶす。

それから封筒を開いた。

「！」

ウー……ウー……

と、サイレンが聞こえた。

ポケットに無理やり封筒を突っ込んで、走り出した。  
するとすぐに、街をビルからビルに飛び回る影を見つけた。

「……まさか、『現代のねずみ小僧』の仕業かしら？」

あんな動きが出来る者はほとんどいない。ともすれば。

「殺しようか。私の手で」

つぶやいてから私もビルの上へと跳躍する。

そして、その影を追い駆けていく。

「は、はあ！？」

影はそう言つて叫ぶ。

「お前、縮地じゃねーかそれ！！」

「！？」

初めてだ。こんなに早く私の移動に気付いたのは。

これは……只者じゃない。

「くっそが！！」

そう叫んで影は消えた。

消えた！？

私は瞬間的に殺気を探そうとする　　が、相手は殺人犯ではない。

殺気では見つけられない。

「逃がした……」

まあ仕方がないといえば、仕方がない。

が、まあまあショックではあった。

「……」

私は静かに、ポケットの紙に手を伸ばした。

『十六夜 縷々（るる） 殿 あなたの入学を心よりお待ちしておりますお

ります。 後世学園』

……後世学園。

「どついうことが……マリア様に聞いてみなければならぬわね」

私は呟いて空を見た。

月はなかった。

### 3話 殺人（後書き）

序章 A h i e r d k i l l e r

はこれで終了です。

バトル要素も取り入れられる可能性を残しておきました。

次は

序章 A p h a n t o m t h e i f  
です。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0210x/>

---

Stragglers Party

2011年10月9日03時20分発行